

三十三所堂

この奥ゆかしさのあるお堂には、すべての生きとし生けるものを救いに導くことを誓った、慈悲の菩薩である観音菩薩像の33のお姿の像が納められている。このお堂は千年以上に渡る巡礼路「西国三十三観音巡礼地」（西国三十三所）の縮小版として重要な役割を果たしている。圓教寺は、西国三十三所の27番目のお寺で、この巡礼路の総距離は1,000キロメートルにも及び、7つの県にまたがっている。

西国三十三観音巡礼は8世紀に成立したが、江戸時代（1603～1867年）になってようやく広く知られるようになった。法華經の一節によると、観音菩薩に救済を求めることで、誰もが大きな困難を乗り越えられ、三十三観音すべてを巡礼した人は、悟りが保障されている極楽浄土に生まれ変わるための功德を蓄積できると言われている。浄土信仰は江戸時代に特に広まり、巡礼は旅行の口実になったのである。

しかし、巡礼の道のりは長く、困難を伴い、伝統的に徒歩で行われた。しかし江戸時代は地方間の行き来は厳しく制限されていた。早い時期から、このような旅行の難しさにより、進取的な僧侶たちが、数十箇所の離れた場所を巡礼する代わりに、巡礼者たちが一箇所で三十三観音、もしくはその一部を訪れることができる場所である「写し霊場」をつくるために努力した。巡礼者たちは圓教寺にやってくれば、三十三観音をすべて拝み、巡礼全体を効率的に終えることができ、浄土で生まれ変わるための功德を享受できたのであった。